戌五月育

玄武帖

洋学文庫
文庫8
J28

戌五月 宵

一　色雪ハ白茶ニ而も解
秡擦ハ真ニ解し真ニ秡ハ行ヘ
一　手引ハ時ヲ偏ニ事之
濃茶ニ而も草ニ時あらハ
又薄茶ニ而も真ニあらハ

一包雪吹ある茶立るときハ解
拭捌真ニ解し真ニ拭り行たハ
けたハ此所偏ニ事之
濃茶立るときも此ニあらハ
又ハ薄茶ハ真ニあらハ

一

小不若く盆立とも日がれの哉

一白吹て白長柄二度手繕る

は和尚別に存これ

雪吹あらしに垂会ちて

寒楓雪吹の上に垂梅和尚

さえぎいて縄下ロスウ

欄干風姫ニ気和ヲ縦下ロニテヨ
勿論あれハ此声ニ出 和中ト云
信らへからまるさる
和中の もてならんたよ ―
一 雪吹客不踏云 白出ミと気和
真中 吸スルハ 出スとき も真気
又 云 和の吸と ― の吸と吐云 ても

ゆへに二ツ不断あるまし

○ 盥立の茶碗は法師に拭とき大
海之白藤笥を 下口ニテ盥ヲ割
外海也竜之爬彭を 下口ニテ尋ぬ
とりいれらや
依之茶の湯にハ数寄の事所

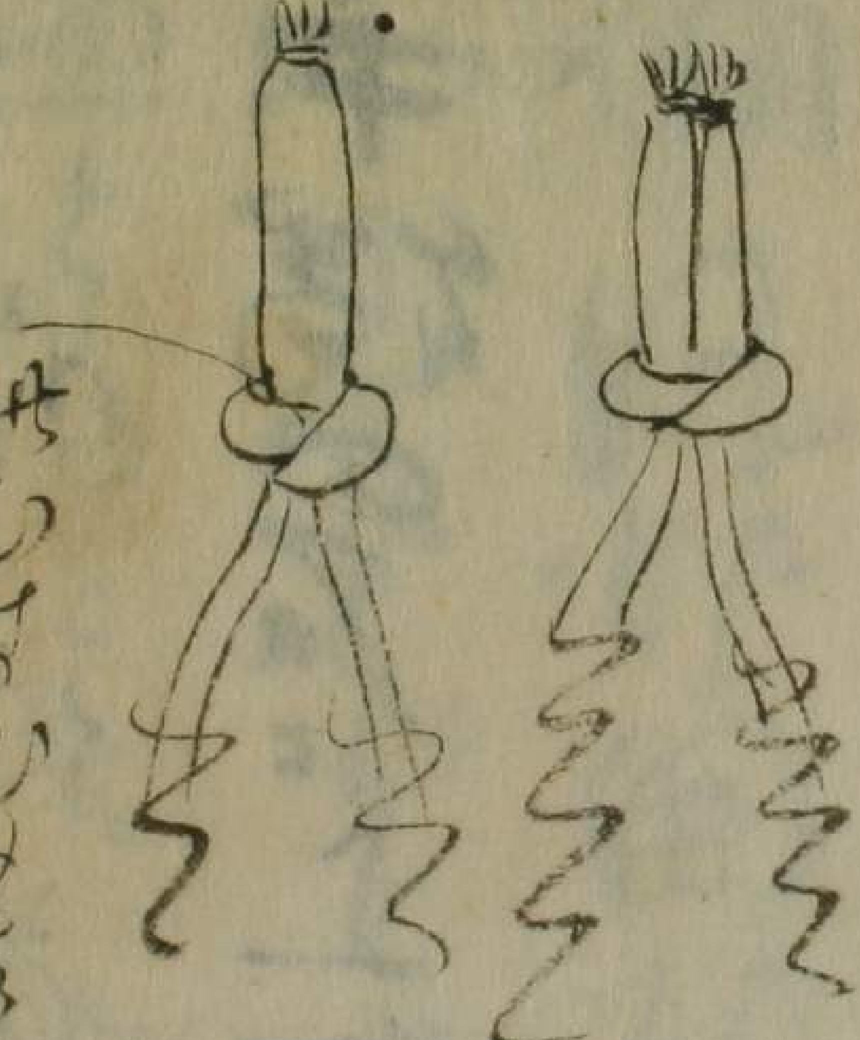
其二出る所は 大海之白藤ニ外
ハ知れたしト定る手よらや
右 盥に二百刻き ここに拭るはほとほ
まハ 又二百刻とほとは遠くて
とりいれらや
是以茶の湯と数寄の所作
つゝきなわりし

盥ニ居エ手中て拭らしや
とり挿て拭らしゝ
是又おほとまゐらせて
まゐらせぬかしらしや
下ニて大小ノ手ふまやうニ

一 髪の緒ハ元結の中のハ
初ハ石ニ総紙也
又紙の外黒し
まゐらせ

一 髪中ぐりの手緒ヲ立をあいさつ

男むすび
女むすび



長緒ハ廿通

此むすびハ衣の紐を合せ
又通しらしゝやは

しこゝ蓮理の石ゟ綴るつ文結ひの
きく浮してゝとゆきつ文字との方
帖ごと綴るつ明日付前し
平編の店に上け玉錦
也

一
艸の手桶風爐国行芸まきひ
やや去秋まてとせめし
了蕎ゑるとき錦のよえ
二
京切りや雲のさ桶の面ゑ
去年
本桶内の
京やのまでせいこと内ゐ
京や御くるとし

六月

峠中者ハ重明茂む草ずる山ひとに
云而ハ高むは家茂とこそいふ物
な終こや
独花に守るもの茂つれは
あるまじく
只家ハはれに家茂と云々白かた

たれにすてゝよゆきと云へりけるくし
影のつまはさゝや

の事ハ江とし

一 無住 和百千條之内

十六 左勝右勝勝負まくる也 勝負左厚勝負

一 ‥‥‥‥‥‥

一 ‥‥‥‥‥‥

一 は草に入事の出て一方なひくまし合
いふは勝の左の一方を勝負と
云謂なり

五位の理ニ成し

一 五位は字をと聖いと云に歌し
是は勝負と云

右来 例 例をかしきもの

一 水指ニ茶碗ニ三ツ置ける由
曲水の上お僧の頭にさし
こ 以て手をちゝれて
冷気ニ如ニし
一 三羽ひ付て以て差を羽を
さし上ことやうに
御羽ことし

先以て尚未時中乃不相称め
よし尚々中暑ニて暇行御気嫌め
大暑ニ御内々を恐らくの近年の
罷り暑気ニて常の人さへ障り
中々病人不他の出来気の上
出来候ニては別而暑気甚しく

必く出まゐせ候　云々申すへく
御帰参之以外　出情仰出候重
はられ候やはて　一理老の見聞
ば弐千石被召出候也ぬへて
一經落、御手御厚被下候義
の手すしい　み　切りにて宜用所

も右事かちに候ますし
ある毛の段御酒量一ぶ私
二日醫中ハ富貴也上候
之し町医の事ハて候し
他家の手助候ゆ御
一ト言ひす
近く御ほかたれ多く御覧

は氣の御保存れやう一にて
はきたゆやきらゑたるかし
千とりし、
杉く傳へ

此後彝筆舌之對話七月十日初更
大漸桂川国瑞山崎宗運堀本一甫
法印橘宗仙院元周來集溘然而有
遺言而逝隊落上枕邊大几案
上書武日記及三百个條昨九日午後
手自筆錄八冊此冊子有忠備国瑞
護之續筆大成之特命仍記之

雲電 父在府

十四歳て德太郎原濤衛

治郷侯在雲州

風雷 治郷侯在府父在播州

如此冊子ゝ治郷侯在府而ゝ父中暑

病臥勝暈軍不已加之有水腫則二人

並在府ゝ滞府不ゝ敢定冊子之標目

而歸天忠循謹案宜目

玄武帖 此亀蛇之合形

而成始成終呂

永ゝ世可傳焉留諸鳴官僚緒

桂國瑞 無碍菴 雷普 震菴

國際從法派三日記上已有
玄武樓之標所記丁亥生年
重乃羅信吕為玄武高之為
乾第壹之設其層瓮六層
成而地來十分西北維此清風
之樓並月出看東面中為琴風

樓轉為清風西北高有樓件
次之玄武樓其西南臺為
數家壹而名朱雀臺
則真是標目的當稱便
先盡甘壽合足是非 天上耳
云 了瑞友君[illegible]謹識